

見るなの禁止

—説話における禁忌の役割について—

景山 史織

(山 愛美ゼミ)

1. はじめに

神話や昔話は、どこの国や地域にも存在する。それらの物語の中に、神がどのように位置付けられるのか、あるいは世界の成り立ちを見ることができる。

例えば、キリスト教において神というのは唯一無二の存在であり、絶対的なものである。一方日本では、八百万の神様といったように、絶対的な創造主としての神が存在しない。また、キリスト教の旧約聖書『創世記』（神話ではないが、世界の創造の話として取り上げる）では、神に創られたアダムとイヴが、禁断の実を食べてしまったことから人間が誕生する。しかし日本神話では、神の子孫が初代天皇であるとか、イザナキとイザナミの会話の中にいきなり人間が登場するなど、いつどのように人間が誕生したのかははっきりとは書かれていない。

だが、異なる部分があれば共通する部分もある。アダムとイヴはエデンの園で善悪の実だけは決して食べてはならないと禁止されるが、蛇にそそのかされて善悪の実を食べてしまう。またイザナキはイザナミを追い黄泉の国へ行つたときに、イザナミに決して部屋を覗いてはならないと禁止されるがイザナキはそれを破って部屋を覗いてしまう。二つとも特定の行動を禁止されており、その禁止は必ず破られる。このような話は神話だけでなく日本の昔話にもよく見られ、それらはほとんどが禁止を破った者のもとから破られた者が去っていくという離別で終わる。

本論文では、世界各国の神話や昔話のモチーフとなっている「見るなの禁止」（見てはいけないという禁止）を取り上げ、禁止を破った者が罪に問われないという日本特有の展開がどうして生まれたのかについて検討、考察をしたい。

2. 「見るなの禁止」の文化

2.1. 日本の美

日本には、花火やシャボン玉、桜など「はかなさ」を美しいとする文化がある。そしてこの「はかなさ」の美は、昔話においても物語を構成する上で重要な役割を果たしている。

昔話の「鶴の恩返し」や「蛇女房」の女性主人公のように自らを傷つけてまで相手に奉仕し、去っていこうとする人たちのことを「自虐の世話役」と北山修（2008）は呼んだ。彼女たちの行動のなかに映し出される「はかなさ」とは、日本語で「移ろい」あるいは「無常」とも呼ばれ、物事が変化しやすく、短命で長続きしないことを指している。

2.2. 「鶴女房」と神話

動物が人間に化けて嫁にくるが、正体が暴かれて去るという話を異類婚姻説話といい、これらは、現代版では冒頭で男性主人公が傷ついた動物を救うところからはじまるが、古い話では報恩譚になっていない。代表的な鶴女房の中心的展開は、まず、男性のところに正体を隠した動物が訪れ、二人は結婚し、女房の生産性（機織り）のおかげで男は裕福になる。しかし、女性が布を織りあげているところを「見るな」と禁じ、男性が禁止を破って覗くと、鶴である女性が自分の羽を抜いて布を織って傷ついているところを見る。そして、正体を見られた鶴が恥じて男性のもとを去っていくという離別で終わる。

多くの場合、女性主人公は母親的に描かれており、女性の方が男性の受け身的対象愛（「甘え」）に応えるかたちで嫁にくる。そして、女性は、子どものような主人公の際限のない要求に応え続ける。このとき女性主人公の自己犠牲や生産性は限界を超えているが、それは「見るなの禁止」によって隠されている。

北山（2009）は、「見るなの禁止」は、傷ついた動物の姿の露呈にともなう美しい女性像の急激な幻滅、そして幻滅させる女性自身の恥の体験を回避しようとするかたちで、見られる側から設定されていると述べている。

もちろん「見るなの禁止」は、日本のイザナキ・イザナミ神話にも見られる。

イザナキとイザナミは日本神話における最初の両親である。女神であるイザナミは、世界における全てのものを生み出す。最後に火を生み出して、イザナミは焼けて亡くなってしまふ。夫であるイザナキは嘆き悲しんで、亡くなった妻を見つけるために黄泉の国を訪れる。イザナミは夫に、黄泉の国の物を既に食べてしまったので、戻ることはむずかしいと思うけれども、黄泉の国の神々との問題について相談すると言う。それからイザナミは夫に、しばらくの間待って、戻ってくるまで自分のことを見ないように願う。しかしながら、イザナキは待ちきれず、火を灯す。すると妻が腐乱した、おぞましい姿になっているのを目にする。死骸に蛆が群がって、異様な音を立てていたのである。ここにおいてイザナキは畏れかきこまって、逃げ出す。女神は、「わたしを恥ずかしい目にあわせた」と言って、黄泉の国の老いた醜女たちとともに追いかける。魔術的な逃走によって、イザナキはこの世に戻ってくるができる。イザナキは巨大な岩を動かして、この世と黄泉の国との境をふさぐ。神と女神は、岩のそれぞれの側の上に立って、向かい合う。イザナミは、毎日この世の千人の人を殺すと言う。それに対してイザナキは、毎日千五百の産屋を建てると言って答える。

『昔話と日本人の心』（河合,1982）より]

2.3. 自虐的世話役

自虐的世話役とされる女性主人公には豊かな生産性と傷つきや死という二面性がある。美しい彼女たちは動物であることや醜さなどを隠しており、これを見ることを禁止するのである。先ほど述べたが、女性主人公は非常に献身的で母親的であり、一方で男性主人公は子どものように描かれる。この物語展開は母子関係が起源だとする解

釈は、その原型と言われる昔話「蛇女房」が、わが子を育てるために両眼を乳房のように差し出す話を根拠にできると北山（2009）も述べている。

2.4. 子どものような男

女性主人公たちの傷つきや死は「見るなの禁止」によって隠されているのだが、ここでその傷つきや死の具体的内容を既成の物語から挙げる。

イザナキ・イザナミ神話では、母神イザナミは国々や神々を生み、女性性器が焼けて死んだ。別の神話である豊玉姫伝説では、主人公の豊玉姫は出産時、悶え苦しんでワニとなった。昔話の鶴女房は、機を織るたびに傷ついていく。そして伝承の蛇女房は、両眼を差し出して目が見えなくなった。

これらは本来、神や動物たちの物語ではなく、人間に起きた出来事である。しかし、この母親たちの傷つきや苦しみは、これを見る当事者や子ども、またこれを語る私たちの心の痛みであるがゆえに、そのまま描くことは難しい。そのため、後に残された人間の視点から、神々や動物たちの話として置き換えられたかたちで、語られているのである。

よって、ここに描かれる男性主人公たちは子どものような男となるのである。

3. 日本の説話のなかの「見るなの禁止」

「見るなの禁止」というのは、決して日本特有のものではなく、世界中の神話に見られるタブーであるが、日本の神話や昔話に見られるものは、他の国の神話や伝説とは相当に異なった特色を持っている。それは、禁止を破った側が罪に問われないということである。

3.1. 禁じられた部屋

河合隼雄の『昔話と日本人の心』では、「うぐいすの里」という昔話を取り上げられている。

若い樵夫が森に入っていくと、今まで見たことも聞いたこともない立派な館を見つけました。館に入ってみると、美しい女性に会いました。女性は少し外出する間の留守を男に頼みました。出かけるときに女性は、つぎの座敷をのぞくことを禁

止しました。男はのぞかないことを約束しました。しかしながら一人になってみると、男は約束を破って、つぎの座敷に入ってしまった。すると、三人の美しい娘が掃除をしていました。ところが樵夫を見るやいなや、三人はたちまち小鳥が飛ぶように姿を隠してしまいました。それから樵夫が次から次へと館の座敷に入っていくと、多くの宝物がおいてあることがわかりました。七ばんめの座敷には小鳥の巣があって、小さな卵が三つ入っていました。樵夫はそれを取り上げ、あやまって卵を落としてしまいました。すると三羽の小鳥が卵からかえって、飛び去ってしまいました。ちょうどそのとき、女性が帰ってきて、自分の三人の娘を殺してしまったことを非難しました。そしてうぐいすになって、女性も飛び去ってしまいました。気づいてみると、樵夫は館を見つけた場所に一人立っていました。しかし館はもうどこにもありませんでした
 『昔話と日本人の心』(1982)より]

このように男性が約束を破っても、女性は罰したりせず、ただ単に立ち去っていただけである。

この物語を西洋の『青髭』という昔話と比べてみると違いがよく分かる。青髭において禁止する者は男性であり、禁止を破る者が女性である。また、禁止を破って部屋に入った女性は夫は殺そうとするのである。部屋で見えるものに関しても、日本の主人公の多くが宝物を見るのに対して、西洋ではぞっとするような死骸の光景を見るという違いがある。

3.2. 葛藤の解決

「うぐいすの里」と同様、罰が与えられず、歌の交換で終わるという日本神話がある。

ホヨリという名の若い神は、兄から借りていて海になくしてしまった釣り針を探すために、海底に降りていく。そこでホヨリはトヨタマビメという美しい姫に出会って結婚する。三年経って、ホヨリは釣り針を兄に返すために家に戻る。何日後かにトヨタマビメが海から現れる。姫は夫に、子どもが生まれそうであることを告げる。ホヨリは鵜の羽で屋根をふいた産屋を造らせる。しかし屋根をふき終わらないうちに、姫は産気づいて産屋

に入る。子どもが生まれようとするとき、姫は夫に対して、子どもを産むときには本来の姿に戻るの、小屋を覗かないようにと言う。変に思っただけで、妻が子どもを生もうとしているところをこっそりと覗いてみる。すると仰天したことに、妻は巨大な鯉になっていて、ホヨリはぎょっとして逃げてしまう。トヨタマビメは実の姿を見られたことに気づいて恥ずかしく思う。子どもを生み置いて、トヨタマビメは立ち去ってしまう。

トヨタマビメは見られたことを恨んでいたけれども、夫が恋しい気持ちを抑えられなかった。だからトヨタマビメは、子どもを育てるという理由で、妹を子どもが生まれた場所に送り返し、次のような歌を託した。

赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君が装し 貴くありけり

するとホヨリは次の歌でこれに答えた。

沖つ鳥 鴨著く島に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のことごとに

『昔話と日本人の心』(1982)より]

トヨタマビメの心には強い葛藤がある。禁止を破り部屋を覗いた夫に対する怒りもあるものの、同時に夫への思慕は強いものがある。この葛藤への解決として、トヨタマビメは歌を詠む。実のところ、浦島太郎の類話のいくつかにも、物語の結末に男女の間で歌の交換が見られる。この物語においても、自分の真の姿を見た違反者に対し、女神は怒ることも、罰を与えることもしない。この物語をギリシャ神話におけるアルテミスとアクタイオンの物語と比べてみると、この違いがよく分かる。ギリシャ神話では女神はアクタイオンにあまりにも腹を立てたので、鹿に変えてしまい、そのためにアクタイオンは最後、自分自身の犬に殺されてしまう。これとは正反対に、日本の女神は怒りをかき立てられず、ただ立ち去っていく。歌の交換は、そんな葛藤の解決となり、日本ならではの終わり方である。

3.3. 西洋と東洋

ここまで日本の昔話と西洋の昔話の違いを簡単に述べてきたが、ここからはさらに西洋と東洋の違いを比較検討していきたいと思う。先ほど取り上げた「青髭」に加えて、キプロスの「三つ目男」

と呼ばれる話を取り上げる。この物語において、ある娘はかなりのお金持ちの見知らぬ男と結婚した。夫は妻に、座敷の部屋のための百一個のカギの束を渡して、どれを使ってもいいけれども、最後の一つは決して使ってはならないと言った。しかし妻は約束を破り部屋を開けてしまう。すると三つ目の怪物に変身した夫が死体を食べている姿があった。三つ目の男は彼女を殺そうとするけれども、王が彼女を助けて、怪物を殺し、結婚するというハッピーエンドになる。

これを「うぐいすの里」と比べてみると、細部に至るまでの違いは顕著である。キプロスの物語において、禁止をする者は男性であり、禁止を破る者は女性であるが、日本ではその逆である。キプロスの物語の禁じられた部屋には、死骸などのおぞましい光景があるのに対して、日本の物語には自然の美しさがある。西洋においては禁止を破る者には死という罰があるが、日本においては何の罰もない。そして最後に至っては、西洋ではヒロインは新たな男性に救われ結婚するのに対して、日本のヒロインは男性を残して去ってってしまう。

3.4. 禁止を破ることと意識

何度も繰り返して述べているが、日本の物語において、禁止する者は常に女性であり、禁止を破る者は常に男性である。この問題を考察するなかで、禁止を破ることは意識を高めることに関係していると河合（2013）は指摘している。

イザナキ・イザナミ神話において、禁止を破ったイザナキはこの世とあの世の境を大きな岩で塞ぐ。これはイザナキが二つの世界を分離したことを意味する。ホヲリとトヨタマビメの神話についても同じことが言える。神が約束を破ったとき、女神は海の底の宮殿に戻って二度と姿を現さなかった。それ以来この世と海の底の世界は分断されてしまった。つまり分離と意識には密接な関連がある。

分離と意識のテーマは『旧約聖書』にも存在している。それがアダムとイヴの話である。二人が禁止を破った後、神の国と人間の国は分離されてしまう。この話は、楽園喪失の物語であると同時に、人間の意識が高まることについての物語でもある。

日本神話とキリスト教における神話の違いは、大きく三つに分けられる。一つ目は禁止する者と禁止される者の性が逆になっていること。二つ目は西洋において、人間が神の禁止を破るのに対して、日本においては神々の間でなされていること。そして三つ目は、西洋は禁止を破った者に罰が与えられるが、日本には罰がないこと。

最初の点は、西洋において男性原理が支配しているのに対して、日本においては女性原理が優勢であることを示唆している。西洋においても日本においても、人間が何かを知ることを禁じる。しかしながら神による禁止にもかかわらず、人間は意識を獲得せざるを得ないのである。西洋の意識は、罰という犠牲を払って確立されるのである。では、なぜ日本には西洋のように罰がないのであろう。その一つの理由は、禁止をする者と禁止を破る者が共に神であり、神と人との間に起ったことではないためである。神と女神が互いを罰するということをせずに妥協をしたのは適切であると思われる。また、河合（2013）は、日本神話においては、禁止を破った者の罪よりも、女神の恥の方がより強調されると述べている。夫であるイザナキに死んだ姿を見られたときに、イザナミは「わたしを恥ずかしい目にあわせた」と言うし、トヨタマビメも夫に鰐の姿を見られたときに、「とても恥ずかしく思った」。つまり、日本においては、女神があまりにも恥ずかしく思うので、人間が原罪を犯す余地がないのである。

このようにして日本人の意識は、原罪というもののなしに成立している。

4. 宗教性からみる西洋と東洋

物語における西洋と東洋の違いを述べてきたが、ここからは、そもそもなぜ西洋と東洋でこのような大きな違いがみられるのかを宗教性をテーマに考察していく。

日本には日本古来の宗教があるわけだが、そこへ儒教や仏教やなどいろいろなものが入ってくる。そして最後にキリスト教が入ってくる。

4.1. キリスト教と隠れキリシタン

キリスト教は16世紀に日本に渡ってきて、日本人はそれを取り入れて今日に至るのだが、弾

圧があったために、250年の間西洋人の宣教師なしでそれを持ち続ける人たちがいた。それが隠れキリシタンである。その人たちがずっと継承してきたものが、隠れキリシタンの人たちの神話として残っている。それが『天地始之事』である。宣教師がいない時期があったため、宣教師から聞いた話は継承するなかでだんだん変わっていき、日本的になったものが今残っているというわけである。要するに、これは、日本人がどのようにして西洋を取り入れていったのかを知る非常に貴重な資料なのである。

4.2. 『天地始之事』

「そもそもどうすと敬い奉るは、天地の御主、人間万物の御親にてましますなり。二百相の御位、四十二相の御装い、もと御一体の御光を分けさせ給ふところ、即ち日天なり」と始まる。

ここで「そもそもどうすと敬い奉るは、天地の御主、人間万物の御親にて……」という言い方は、この世界をつくった創造主としての唯一の神という考え方がそのまま入っていることがわかる。一方、日本神話では「久羅下那州多陀用弊流（くらげなすただよえる）時、葦牙（あしかび）の如く萌え騰あがる物に因りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじのかみ）。次に……」（『古事記』）とあるように、どこからともなく自然にできあがってくるという考え方である。そのため創造主としての唯一の神を素直に受け入れる人と受け入れがたい人が出てくる。そこで宣教師の人たちは、日本人を説得するために自然科学を用いた。「世の中には原因があるから結果がある。だから今のこの世界に対しても原因があるはずだ、そして、その第一原因が神である」と。

また、「もと御一体の御光を分けさせ給ふところ、即ち日天なり」とあるのは、太陽を創造主が全部つくったと思いたくない日本人に対し、太陽は神の分身であるというふうに説明しているのである。このあたりには仏教的な考えや日本的な考えが入ってきている。

4.3. 原罪

キリスト教では旧約聖書をみると、原罪は非常に重要な意味をもっていることがわかる。人間というのはそもそもアダムとイヴが原罪を犯して、

楽園を追放されて、この世に生きているのである。だからその罪を償わなければいけない。そのためにキリストがこの世に降りてきて、十字架にかかって、人間の罪を背負い償う、というふうに話が展開する。しかし、日本においては、3. で述べたように原罪は必要とされていない。そのため、この当ても日本人にとってこの原罪というのはとてもわかりにくいものであった。そのため『天地始之事』の中では原罪がなくなっている。ここでは、デウスがアダム（あだん）をつくり、それからイヴ（ゑわ）をつくった、それから二人のあいだに二人の子どもができることあり、その後の二人の罪は描かれていない。ここで注目したいのが、『旧約聖書』のアダムの骨からイヴが生まれるという話がなくなっているということである。他の国の神話を見ても、女性が男性からつくられたという神話は比較的多い。

日本では、イザナミが日本の国の全てを生んでしまう。ところがイザナミが死んで、イザナキが黄泉の国へ行き、見てはいけないイザナミの姿を見て逃げ帰ると、その後イザナキからアマテラスが生まれる。このようにアマテラスという非常に大事な女性は父親から生まれるのである。つまり、女性が全部生んだとも、いちばん大事なものは男性が生んだとも考えることができるのである。

4.4. 神話における男性と女性

すべての人間はお母さんから生まれている、つまり女性が根本である。しかしいつの間にか女性よりも男性の方が権力を持ち出すようになった。そういうものが強くなってきたときに、母親はそもそも男から出てきたんだ、男のほうが先なんだ、という話をつくって男性優位を強調するような時代があった、そのためにこのような神話が生まれたのではないかと河合隼雄（1993）は述べている。

日本神話は、女性原理ではじまり、途中で男性原理が入ってくる。ところが旧約聖書の場合は、男性原理が非常に優位に出てくる。アダムからイヴが生まれるというのはキリスト教にとって大変重要であると言えるのだ。

4.5. 日本人にとっての原罪

禁断の実を食べたために、『旧約聖書』では「原罪」が生じる。原罪によって人間が苦しんでいるので、キリストの十字架による贖罪が大きい意味

を持つ。しかし隠れキリシタンの人々にとって、原罪というのは非常に受け入れがたいものであった。そのため『天地始之事』では、木の実を食べたアダムとイヴの前にデウスが現れ、それが悪の実であることを告げる。そのとき二人はもう一度「ばらいそ」の快樂を受けさせてほしいと願う。すると「四百余年の後悔すべし」と言われ、時間はかかるにしろ罪は許されることになる。これが隠れキリシタンの大きな特徴であると言える。

日本人は春・夏・秋・冬と季節が巡り、一年が終わればまた次の一年が来るというように円環的な人生観を強くもっている。どんなことをやっても、なんとかやっていたらまた元へ帰ってくる。そのため、原罪というのは受け入れがたく、罪を許すことで生きていくことができたのではないかと考える。

5. 禁止を破った男の罪

5.1. 男の罪の無自覚さ

ここでもう一度日本の昔話に話を戻したい。「鶴女房」や「蛇女房」に出てくる女性主人公たちはみんな一方的な惚れ込みで嫁にやってくる。つまり、女性よりも男性のほうが優位に立っており、関係成立の責任は主人公にはないという設定になっているのである。『夕鶴』では、女性の一方的な惚れ込みから始まり、つうは一生懸命与ひょうの要求にこたえようとする。この愛されたいという欲求が見事に幻想的な世界として展開されている。しかし、与ひょうは見てはいけないという禁止を破り、つうの傷ついた姿を見てしまう。この命を紡いだつうに対する責任が与ひょうにあることは明らかである。また、火の神を生んだことが原因で命を落としたイザナミに対して、その責任をイザナキが背負うことは当然のことである。しかし、イザナミを追いかけて黄泉の国に行ったイザナキは、そこで「吾と汝と作れる国、いまだ作り竟へず。かれ、還るべし」と、死んでなお、イザナミに国を生まれようとしているのである。このときイザナミは「我をな視たまひそ」と言うが、これは婉曲的な禁止表現であり、「いくぶん哀願・懇願の気持ちを持つ」（『時代別国語大辞典』上代編、三省堂）表現である。イザナキは、イザナミ

の「哀願」が意味することに対して自覚なしに覗き見たのである。

このように、イザナキの無自覚（妻を死に至らしめた責任に対する無自覚、死んだ妻になお国を生まれようとする無自覚、「見るなの禁止」を課した妻の哀願に対する無自覚、禁止を破って帰還したとき「見るも醜く汚い国に行っていたことだ」と言って、いつのまにか自分が被害者に転じてしまっていることに対する無自覚）は明らかである。

5.2. みそぎ

黄泉の国から帰還したイザナキは、自分の身に纏いついたケガレを清めるため橋の小門のアハキ原に行く。北山（2009）は、そのケガレの中心に「汚い」という嫌悪感があり、それがみそぎの動機づけとなっていると述べている。さらにみそぎとは「すまないものをすませる」試みであって、それは実は自分の罪悪感である「すまない」を「すませる」という、心的な苦痛の処理であると論じている。つまり、イザナキは死のケガレのみならず、禁止を破った自分の〈罪〉をもみそぎによって清め、水に流してしまったと考えることができる。その結果として、イザナキは〈罪〉に対して痛みを感じる機会を手放してしまったのである。

数多く存在する「見るなの禁止」をモチーフとした神話や昔話で、禁止を破った者の罪を問わない意識構造の原型がここにある。

6. おわりに

本研究においては、「見るなの禁止」というテーマを扱う日本やその他の国の神話や昔話を取り上げて検討したところ、このテーマを調べる中で、なぜ日本の神話や昔話では、禁止を破った者が罪に問われないのかという疑問に突き当たった。本論文では、日本神話におけるこの「見るなの禁止」を、日本人のこころや文化の問題という視点から捉えた河合隼雄と北山修両氏の考えを論じてきた。『昔話と日本人の心』のなかで河合（1982）は、日本の神話や昔話では「タブーを犯したものに何らの罰が与えられず、タブーを犯されたものは悲しく立ち去ってゆく」とし、さらに「禁を犯して見る罪よりも、見られることによる恥の方に強調点がおかれている」ところに特色があると述べて

いる。見られた女性の悲しみのなかに日本的な心性を読み取ろうとするのであり、見た側の罪については言及されていない。これに対して北山(1988年)は、『悲劇の発生論』のなかで、日本神話や昔話には「受身的に見られた側ではなく、〈見る側〉の視座をその劇的世界の中心において、見られた側との関係が描かれている」とし、美しい母が醜い母でもあるという〈見た側〉の急激な幻滅体験の結果として生じる罪悪感の存在を指摘したのである。

この二人の見解の違いは非常に興味深いものである。見られることの恥が見た者の罪よりも強くなるという考えは、見た者に怒りと同時に強い思慕の念を抱いているからこそ成り立つのであり、日本の女性の心性がよく映し出されていると言えるのではないだろうか。

文献

- 北山修 橋本雅之(2008)日本人の〈原罪〉 講談社
- 河合隼雄 河合俊雄訳(2013)日本人の心を解く 一夢・神話・物語の深層へ 岩波書店
- 河合隼雄(1982)昔話と日本人の心 岩波書店
- 河合隼雄(2003)神話と日本人の心 岩波書店
- 北山修(2001)幻滅論 みすず書房
- 北山修(1993)見るなの禁止 北山修著者集1 岩崎学術出版社
- 河合隼雄(1993)物語と人間の科学 岩波書店
- 関敬吾編(1978-80)日本昔話大成 全12巻 角川書店
- 西宮一民(1979)古事記 新潮日本古典集成
- 北山修(1988)悲劇の発生論 増補新装版 金剛出版
- 上代語辞典編修委員会(1967)時代別国語大辞典 上代編 三省堂